

## 拝借景／非の無い処に煙を立てる。 Haishakkei/ The “Bagic”

---

2014.02.23 Sunday

拝借景／非の無い処に煙を立てる。

「火のないところに煙は立たぬ」ということわざは、「うわさが立つには何か原因がある」という意味である。「火」という原因があることによって、「煙」という結果が生まれるのだ。

しかし現代においては「火のないところにも煙は立つ」時代である。噂話に始まり、さまざまな商品や製品、サービスまでが、メディア社会の中で様々に語られ、人々の間で「流行の商品」として扱われたり、「渦中の人」などと認識されたりする。われわれは「新しい商品」や「新たな人」に出会う度に、まず先にネットで検索し、「商品の価値」や「人間の実力」すら、品定めてしまっている時代なのだ。結果、原因や根柢となる「火」が、「モノの本質」や「人間の真価」を遙かに超え、「よい煙」「わるい煙」として一気に立ち昇る。

「拝借景」に集まるアーティストたちには非もないし、悪気もない。アートの商業性や流行に対し、多少「鈍臭い」とも言える。しかし、ひたすらに「場の力」を考え、それを作りとして提示する彼らの姿は、ひたむきな態度と無邪気さで満ちあふれている。

一方、全国に広がってしまった日本型の「アートプロジェクト」や「アートフェスティバル」は、ある見方をすれば相当タチがわるい。アートの公共性が真っ先に語られ、たとえ「場の力」を欠いた展覧会になったとしても、「まちおこし」や「市民の為のイベント」の名の下に、ただ目の前の経済効果が上がれば、「わるい煙」のはずが「よい煙」と考えられるからだ。

「アートの本質」を考えたとき、作品や行為によって「場」に力が与えられることこそが「アートの本質」ではないかと考えている。私はこれを「魔法」ならぬ「場法」と呼んでいる。誰も見向きもしない場所や空間に「場法」がかかることで、その「場」や「空間」の価値が上がるのだ。古くから人々は、そういった「場法」によって、本来は姿形の見えない神や仏を信仰したり、崇めたりするようになった。偶像崇拜を禁止している宗教に於いてすら、儀式という一種のパフォーマンスを行い、「場法」をかけてきた。

この展覧会は、取手に関わるアーティストを中心に「場法使い」を招いた、「アートプロジェクト」とも「アートフェスティバル」とも異なる、「アートの本質」から見た展覧会だ！

「拝借景／非の無い処に煙を立てる。」展 オーガナイザー 下西 進

<http://haisyaku.jugem.jp/?page=1&cid=33>